

13. ドタ・イナオシ

摂津市域では深田のことをドタという。大阪平野のなかでも摂津市域の特色ある民具といえばドタで使う道具類であろう。ドタではイナオシと呼ぶ田舟が使われた。

ドタの農業

摂津市域にはドタ（湿田、深田）が多い。鳥飼上では一毛作田をスイデン（水田）、二毛作の出来る田をハタケ（畠）とかタカタ（高田）といった。鶴野では米だけしか作れない一毛作の湿田をドタ、二毛作の出来る田をムギジ（麦地）と呼び分けていた。

鳥飼上は7割が二毛作田、鳥飼下は3~4割が二毛作田で下へ行くほど一毛作田が多くなった。一津屋もドタ。別府は旧神埼川の砂地を除いて腰まで浸かるドタ。ドタ地帯は洪水で冠水すると一面の湖となった。近隣では門真市・守口市は一毛作田ばかりだった。

畦の見えない広い沼

スイデンの境界は杭一本だった（鳥飼上）。ドタは深くてヤナギの芽が出たところがサイメ（際目）。慣れん若い嫁さんなどは他人の田まで田植えしてしまった（別府）。

ドタの草取りは手でかき回す。5株分を掻いて往復すると腰が痛とて痛とて（一津屋）。

イナオシ

A はイナオシ。湿田用の長方形の田舟で、長さが129cm、幅74cm、深さが22cmの長方形の舟である。施肥のため肥桶を積んだり刈り取った稲を運ぶのに用いられた。

タンゴ4つを後ろに積んでこやしを打った。ナンバを履いて後ろから押した（別府）。稲をのせてダテ（稲木）まで押したり引いたりして運んだ。奥（後ろ）の方に多く積むと先が上がって引きやすい。稲の株を残さず刈っておくとイナオシが滑りやすい。1マチ4~5反という大きな区画のスイデンではイナオシを牛に引かせた（一津屋）。

稲木に干した稲をイナオシに積んで牛に引かせて畦まで持ってきた（鳥飼下）。

昔の田舟

B は江戸時代の『農具便利論』に出ている「田舟」で、「深田の稲を乗せて引、また八土をのする具」とある。長さは120~150cm、幅は66~69cm、深さは21~24cm。

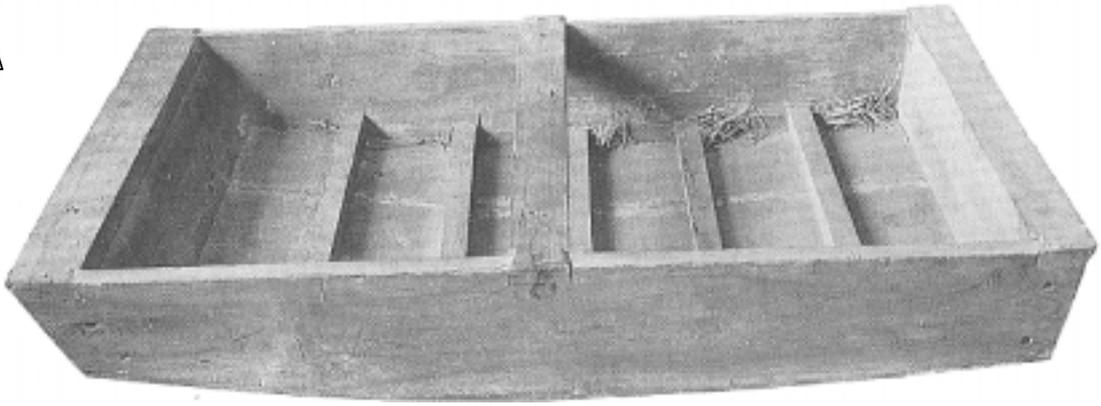
C は清水市出土の2000年前の弥生時代の田舟で、厚板をくり抜いて把手付き。

牛の腹がつかえるまで

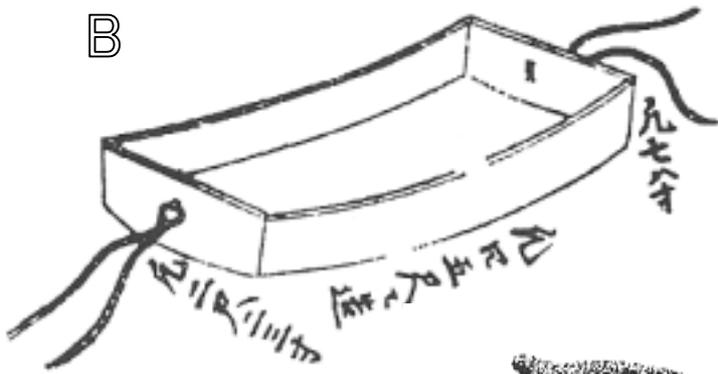
足のめり込むドタでも牛の腹がつかえるまでは牛を使ったと誇る人が多い。それ以上深いと備中鍬で稲株を返すだけだったという。

D は『絵本通宝志』の近世の大坂近郊農村。牛の腹のつかえるドタの作業だ。

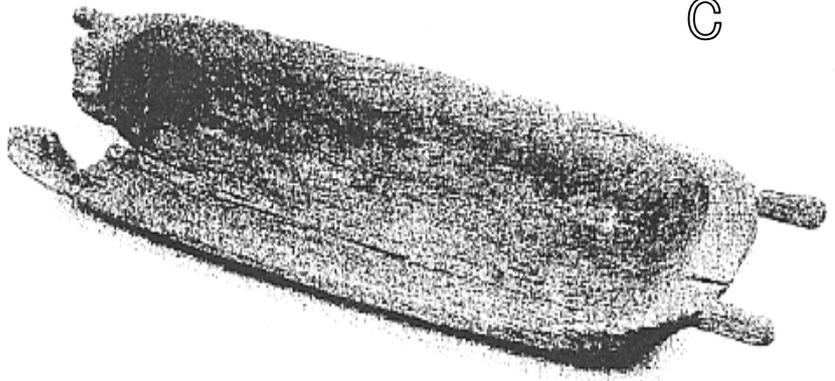
A



B



C



D

